

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

ころざし

今でもときどき小学生にあがる前の4～5歳頃の記憶を思い出します。

木造二階建て長屋の我が家の家中に大量のランドセルやセルロイド製筆箱が山のように積み上げられていたのです。時代

絵はどれも直筆ですから日本画への需要は相当あったのです。

しかし敗戦まもない頃、誰もが娯楽より日々の食べ物を手に入れるのに必死でした。

父親は、終戦までの2年間、兵庫県の高射砲部隊で過ごしたあと復員しましたが、とうぜん日本画の需要などあるはずも

なく親子4人、餓死しないように日々の食料を手にいれるばかりの数年間だったと思います。

世の中が落ち着いてきた頃、知り合いからベビーブーム世代の子供たちの大量需要が見込める学用品や化粧品容器のデザイン画の仕事が舞い込み始めます。

この内職のおかげで手伝いの人を2～3人雇う余裕も生まれました。

しかし父が画業を中断してすでに10年以上が経っていました。

あるとき久しぶりに普通だった画材店に立ち寄ったとき、戦前に所属していた東京の川端龍子主催の団体展復活のニュースを聞かれます。

知らせてくれた先輩画家は食料難の時代にも絵の修業を続けていたと聞かされ、父の心は大きく揺らぎます。何のために大阪に出てきて画家を目ざしたのか、生活のためとはいえ、自身の「ころざし」を金稼ぎだけにすり減らす日々激しく疑問を感じたのでしょう。



は1955年頃、1945年8月15日の終戦から10年経ち、大量の団塊世代（1947年～1949年生まれの子の世代）の子供たちが就学年齢に達し、この世代の学用品の需要が爆発的に膨れ上がった頃です。

僕は1949年4月生まれ、戦後生まれの団塊の世代です。二人の兄達は4歳と2歳の頃に母親に手を引かれてB29の落とす爆弾・焼夷弾から逃げ回った戦争体験者です。

日本画家の父は、農家の次男で画家を夢みて17歳の時に単身で大阪に来ました。

当時の日本家屋には、どの家にも床の間があり、玄関にはツイタテ（衝立）、座敷の境界はフスマ（襖）があり、そして床の間には縁起物の掛け軸の絵が飾られ、衝立には魔除け・厄除けの意味をこめた睨み虎図などが描かれていました。

父は学用品の絵付け仕事を辞め、日本画家一本の道に戻ろうと決心します。

しかし、その決心を試すように私が生死をさまよう肺炎にかかり、小学3年の2学期を全休してしまいます。

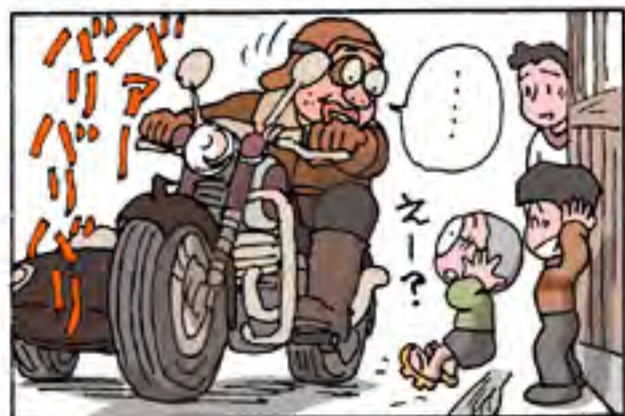
戦中戦後の10年以上のブランクと次々やってくる困難に耐え描き上げた出品作品が先の団体展に見事入選を果たします。

父の執念に神様が微笑んだ、それまでの苦勞が報われた瞬間でした。

「人はなんのために生きるのか」と自問自答するとき、この時の父のことを思い出さずにはおれません。

やぶにらみ記

東成区の昭和(102)



やぶにらみ記

東成区の昭和(103)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(104)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(105)



やぶにらみ記

東成区の昭和(106)



やぶにらみ記

東成区の昭和(107)



やぶにらみ記

東成区の昭和(110)



やぶにらみ記

東成区の昭和(111)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(112)



やふにみ日記

東成区の昭和(113)



やぶにらみ記

東成区の昭和(114)



やぶにらみ記

東成区の昭和(115)

